

児童健全育成賞（数納賞）佳作

児童館が中高生の生きる力でありたい

～たかつかさ児童館における思春期児童の実践より～

京都府京都市

社会福祉法人京都保育センター

たかつかさ児童館 児童厚生員 溝口 晋太郎

1、はじめに

平成20年4月にたかつかさ児童館に着任して驚いたことがある。児童館に中高生が遊びに来ていたからだ。

もちろんこの仕事を私が選ぶときに、児童館が0歳～18歳までの児童が利用できる施設であることを理解していたことは言うまでもない。しかし、私が着任する前にボランティアやアルバイトをしていた複数の児童館では中高生が利用している姿をほとんど見ることができず、つい驚いてしまったことを鮮明に覚えている。その驚きと同時に、「何故中高生が児童館に来ているのだろうか」と当時疑問に思ったことも覚えている。その頃はこの仕事の役割理解が乏しかったこともあり、安易に中高生という興味関心と行動範囲が格段に広がる時期に児童館には来ないのではと思ってしまっていた。しかし、現場の児童と関わる中で、中高生は学童期とは異なり、思春期特有の考え方や行動、仲間関係などにおいて、様々な問題を抱えており、自分の居場所を求めて児童館に来ていることが分かった。中高生の支援について、私が向き合った第一歩だった。

ここ数年間の京都市の児童館事業は家庭構造や地域役割の変化といった社会情勢を背景に、拡大と質の向上が求められ、多種多様な活動が行われて来た。しかし子どもをとりまく目まぐるしい社会の変化、社会に伴う制度の変化、制

度に伴う事業の変化、に対応することが難しく、苦慮していることも事実であり、現場も大変な努力が必要となってきている。特に、思春期(児童を対象とした)事業は、京都市の児童館事業の変革時期と重なっていたため、大きく変化が起こっていた。

ここではたかつかさ児童館が児童館をとりまく事業の変革と活動を行う上で浮き彫りとなった課題に対してどのように向き合い、実践を行ってきたのか報告したい。

2、思春期児童の活動推進と課題

京都市の児童館では平成21年9月から児童館事業の時間延長を実施しており、中高生への居場所提供など積極的な取組の推進が行われてきた。これは、乳幼児から中高生までが利用できる児童館ならではの取組であり、多世代交流、地域住民とのふれあいなど、施設の特性を存分に生かしたものだと考えられる。具体的には、平日午後5時以降の時間帯を中高生が利用しやすい時間と定め、活動を支援することとなり、合わせて閉館時間を30分延長して、午後6時から6時半に変更となった。

元々、たかつかさ児童館では、平成13年から毎週土曜日夜6時から9時まで「夜間開館」という部活動や習い事など平日忙しい中高生が児童館を利用するための居場所支援を行ってきた経歴があり、児童館でスポーツや夕食作り、お

しゃべりなど気軽に立ち寄れる居場所づくりを実施してきた。

また、平成15年より「中高生と赤ちゃんとの交流事業」という、次世代の親となる中高生が赤ちゃんやその家族とのふれあいにより、命の尊さや子どもを産み育てる大切さを知る機会を提供してきた。このような取組の実績もあり、中高生の来館が一定行われてきた。しかしながら、土曜日の来館はあっても平日の来館が非常に少なかったため、この時間延長で思春期児童の活動推進にどのようにつながるのか予想すらつかなかった。とりあえず土曜日に来館のあった児童を中心に、「中高生の遊べる時間がふえたよ」と声をかけ、児童館ニュースを渡して広報をした。また、地域の6つの中学高校に広報チラシを置いてもらい、いくつかは全校配布をしてもらった。

最初はほとんど平日の来館児童は少なく、土曜日の来館は多かったものの、「平日の利用は中高生にとって難しいのかな?」と思わせるほどだった。しかし、時間延長が実施されて3年後には中高生の来館はかなり多くなった。ちょうど私が思春期事業の主担当になった頃であった。

平日夕方学校帰りに遊びに来る子どもたち、卓球、バレー、ギター、マンガ、おしゃべり、ただ携帯をいじるだけの児童もいれば、小学生向き企画のきりえにチャレンジする児童、待ち合わせの場所にすむ児童、中には周辺6つの学校だけではなく、自転車で学校から20分、家から30分以上かけて来館する児童の姿もあった。利用が多くなって、対応の難しさも露呈してきた。

まずは、職員体制の確保が非常に困った。京都市の児童館は施設長1名、児童厚生員4名の職員体制である。そして、夕方5時以降に残る職員は施設長1名と厚生員2名、6時以降施設長は退勤となり、厚生員2名で来館する児童に対応している。京都市の児童館は広く地域の児童を対象とした(乳幼児から中高生を対象とする)「自由来館機能」と昼間留守家庭児童を対象とした「学童クラブ機能」を有する一元化児童館という形態である。つまり、5時以降中高生が

利用しやすい時間といっても、学童クラブの児童の保育と同時並行に行わなければならないのである。

現場の職員が直接対応せざるを得ないのは、学童クラブの児童である小学1年生～4年生とお迎えにやってくる学童保護者に集中してしまうのも仕方がない。さらにたかつかさ児童館は2階建ての施設であり、学童クラブ児童の育成室(生活スペース)は1階であり、中高生が利用する図書室や遊戯室(活動スペース)はそれぞれ、1階の別の部屋と2階となり、職員が対応できる範囲も限られてしまい、中高生をある意味ほったらかしにして、自由に遊んでもらうことが中心となってしまっていた。もちろん、中高生ともなれば、子どもたちだけで遊ぶことや、大人を毛嫌いするため一人で過ごすことを好むことも多い。しかしながら、家庭や学校と違い、ほっと自分を出せる場所で、身近な大人・年齢の近い大人も多く、職員と遊びながら、家族や友達へのグチ、学校の勉強内容や進路相談、恋愛相談など気軽におしゃべり相手を求めているのも、思春期の特徴ともいえる。中高生と「思いっきり関わりたいけど、関われない」そんなジレンマに苛まれてしまっていた。

次に、利用する中高生の様々な子ども像への対応がとて複雑で困った。利用する児童が増えてきた時期、児童の中には、学校終わりに来る児童だけでなく、学校をさぼって来館する児童もいた。「授業がつまんない」「友達とケンカした」「部活が嫌だ」そんな言葉が児童から聞かれ、同じような課題をもった児童を引き連れ来館し、また別の課題を持った児童と新たに児童館で出会い、仲良くなっていった。

しかし、次第に学校に行かずに朝から児童館で過ごす児童、児童館の閉館後も夜に家へ帰らずに徘徊をする児童、親に連絡せずに児童館で知り合ったもの同士泊まりあう児童、喫煙や飲酒など非行行動の匂いを漂わせる児童も実際数多く見られた。

実際に学校が児童館で朝から遊んでいると嗅

ぎつけて、児童を車で連れてかえった。ずっと夜遅くまで児童館外で大きな声でおしゃべりをしていて、職員が注意をした。夜家に帰らずに心配する親から何度も児童館へ「子どもに注意をしてやってください」と相談をうけた。私の携帯に早朝から「うちの子が家に帰ってこなくて、どこにいるのか知りませんか」と電話が鳴り響いたこともあった。夜遅く家庭のトラブルで家へ帰れない子を親戚の家へ送り届けたこともあった、気づけば時計の針が日付をまたいでいた。

何かトラブルがある度に、対応に苦しみ、考えさせられ、中高生を全て児童館で対応することは無理だと思った。しかし、あるとき、自分だけでなく、そういった児童も同じように「悩み、苦しみ生きているのかな」と考えた。コンビニやアミューズメント施設の前でたまるのではなく、児童館でたまっているという意味を考えると、児童館でこれだけ「様々な課題を抱える中高生の様子を掴めている」ということを素直に一つの役割として前向きに捉えることができた。

3、思春期児童向け活動の充実

それならば、やはり少しでも「児童に健全な遊びを与えて、その健全育成を図る」という児童厚生施設である児童館の役割を生かしていく必要があると思った。そして、そこに思春期児童の活動推進と課題に対応するきっかけがあると考えた。

課題として挙げられた2点について考えてみると、職員体制の問題を抜本的に解決することは難しいと考えられる。限られた人員で、アルバイトを雇う予算もなく、時間シフト制で5時以降に職員を確保しても、次は午前中の事業に体制が取れなくなることも予想される。そこで職員はいなくても、中高生が自身で考え活動を推し進めることで自主性を、様々な人やものとふれあう活動を通して社会性を養うことができたならば、児童館で過ごす活動の中身も変わり、児童館で自立的に活動することができるのではないか。さらに様々なことに興味関心を持つことで視野が広がるほか、人の暖かさや良さ、価

値観を知ることで、課題を持つ児童の心情にも変化をもたらすのではないかと考えた。

そこで、中高生に児童館という施設の特性を生かした、体験活動と多世代交流活動を推し進めることにした。この活動はいずれも助成金活動をベースに、既存の児童館事業を組み合わせで実施した。

①体験活動・多世代交流の実現

まず1年目にとことん機会を作った。この頃はあくまでも職員が利用する児童に、これならできるのではという視点で取組を提供する中で、子どもの意見や思いを抽出できたらと考えていた。

地域の課題に主体的に取り組んできたNPOと交流を行う「京都の食文化を体験しよう」という「子どものための児童館とNPOの協働事業」の助成金を活用することで地域交流体験活動を中高生向けに実施した。この題材は夜間開館の夕食作りに参加したことがある児童も多かったため、いきなり始めても抵抗が少ないのではないかと考え、実現に至った。

しかし、夜間開館の夕食作りでは職員と児童だけで、「何をつくろうか」とその場で考え、取組を行ってきたため、全く関わったことのない外部の人が来て交わることに困惑する児童もたくさんいた。さらに体験活動を行う上で、事前に打ち合わせを行うという段取りに対して「めんどくさい」という意見や話し合いをしても、しゃべらないことが続いた。

幸いなことにNPOのスタッフは児童と関わった経験があったため、会議も「いるだけでいいよ」と声をかけ、作業に飽きっぽい児童にも活動中全員休憩をする時間を作り、気分を紛らわせてくれた。「京野菜フレンチ」「京都バーガーづくり」「手作り豆腐体験」など全5回実施して、徐々に児童が講師に主体的に調理についての質問や指示を仰ぐなど、コミュニケーションをとる姿が見られるようになった。また、日常の夜間開館夕食作りでも、手際が良くなるだけでなく、「今日はこのメニューを作りたい」と意見が出るようになり、既存事業にも良い影響が生まれた。

同時並行で、キリン・子ども「力」応援事業の

助成金を活用して、多世代交流体験・文化体験活動を実施した。これは、児童が様々な世代との交流、体験したい文化的取組を考え、「多世代交流キャンプ」「じどうかんまつりの運営」「京都のおどり体験」「中学生宿泊合宿」など全5回実施した。

実際に活動をしてみると、男子は「おどり」ははずかしいからと嫌がりほとんど参加者がいなくなる、突然ケンカがはじまり収集がつかなくなる、学校や部活動で急遽人が集まらないなど活動の展開が読めないこともあった。それでも、キャンプでは小学生世代と一緒に活動、じどうかんまつりでは地域の大人世代といっしょに運営に携わり、おどりでは大学生世代を講師に、京都の民舞体験を行い、活動を進めた。

活動を進めながら、どんどん中学生の出番が増えていき、「自分たちで企画できた」と児童も自己実現の喜びを感じるが増えていった。年度末の最後の取組は、ほぼ中学生だけで内容を決めて良いことにすると、「カラオケがしたい」「児童館より広い場所でスポーツがしたい」という多世代交流体験・文化体験から全くかけ離れた意見が出た。それでも、中学生が一年間積み重ねた経験から本当に自分たちがやりたいことだったらと、児童館に寝泊りする宿泊合宿として実施した。食文化体験で得た知識も活かして、「夕食は京食材使おう」と意見も生まれた。活動を通して「やりたい」「楽しい」と感じる気持ちの表出が中学生に見られるようになった。

②既存事業への参加

2年目は既存の事業に中学生が参加できるように様々な取組に呼びかけた。今年の活動では、テーマを決めて予算と計画に基づいて行ってきたが、前述の通り、職員主導で行われたものがとても多かった。今回の課題に関する考察として挙げた「児童館で自立的に活動する」ためには、やはり児童が実際に「やりたい」から出発して、準備を行い、実行していく、自覚と責任に基づいた活動を行っていく経験が必要だと考えられる。さらに予算の面でも、助成金を活用しない今年度でできることは、いかに既存の事業に児

童が参加していく中で、主体的な活動に基づく経験を積んでいくかだと考えた。

I【中学生と赤ちゃんとの交流事業】

今までは学校に広報を行っている事で、日常来館児以外の参加が多かった背景がある。しかし昨年、中学生の取組が活発化して、特に多世代交流の経験から、この事業に参加してくれる児童が日常来館の児童から増えることとなった。赤ちゃんに関わることに好意的なのは女子児童であったが、わからないけどやってみようと言ってくれる男子児童の姿もあった。時には、事前にこの事業に申し込んでいないにも関わらず、どうしても参加者が少ないときに職員が「頼む参加して」と急に言っても答えてくれる姿が見られるようになった。

今年の活動からこんな特技があったのだと気づかされた児童がいる。食文化体験で「京都の素材を使ったお菓子作り」を行ったとき、お菓子のデコレーションをとっても細かく神経質に行う男子児童がいた。手先が器用なこともあり、みんなに褒め讃えられていた。中学生と赤ちゃんとの交流事業でクリスマスの時期に中学生がサンタとなり、乳幼児親子の自宅にプレゼントを届ける取組を行った。そこでプレゼントの他に、バルーンアートを目の前で作ってあげることにした。そのとき、その男子児童は自分がやりたいと積極的に手を上げて、見事こなしてくれた。体験活動で自信を深めて、自らやりたいと意見を出してくれたことが嬉しかった。

地域の6つの学校に広報を行っていたこともあり、事業の様子を記したお便りに当日参加した児童の様子を掲載して、学校に伝えるようにした。また地域・学校に配布している毎月発行の児童館ニュースでも児童館での中学生の様子を伝えるために詳しく行事や参加者の感想を掲載するよう心がけた。少しでも児童館での中学生の姿を知ってほしかった。

II【夜間開館】

1年目に様々な活動を行ったことで、中学生の参加者が増えたことは言うまでもない。しかし、中学生の関係性が深まる中で、ギクシャクする

と関係性が悪くなり、日常で来館しなくなった中高生や同じ児童館にいても言葉をあえて交わさない様子も見られた。

そんな中スタートした今年度の夜間開館は、昨年児童館を卒館した中高生が屋台骨となっていたため、活動が心配な面もあった。しかし、そんな不安をよそに、定番といえる夕食作りの他に、昨年のスポーツ体験の名残から、スポーツ企画を盛り込み、定例の企画とすることとした。夕食作りは中高生のニーズとは少しかけ離れたのか、スポーツをする月は夕食作りをしないなど、活動を整理して行った。中高生が昨年やって良かった「中高生合宿」の取組は今年度も自らやりたいと要望してくれたので、行うようにした。

合宿の内容から参加者を集めることも中高生の役割だと伝え、何回も話し合いを行う中で、準備を進めて、当日無事に合宿を行うことができた。やりたいと一度言った取組は以前のように「めんどくさい」ではなく最後までやりきる粘り強さが児童についてきていると感じた。結局、1年を通して関係が上手いかわない中高生もいたが、取組を通してコミュニケーションを深め合った経験は今後必ず生きてくると期待をすることができた。合宿解散時に「このままもう一泊したい」とみんな口を揃えて言った。よほど楽しかったに違いない。

Ⅲ【まつりの運営と模擬店の出店】

児童館で行われる地域向けのまつりを毎年行っている。まつりは地域の子育て関係団体が集まる「たかつかさ子育てネットワーク」が主催をして様々な役割を分担し実施している。中高生はまつりに昨年も関わったが、より児童に役割を与えて運営できるように、ネットワーク会議の場で意見交換を行い、模擬店のコーナーと小学生の遊びコーナーのお手伝いをしてもらうように分担をした。児童の中には自分たちがまつりを楽しめないという意見もあり、みんながまつりを楽しみつつ、運営にも携わってもらうことにした。以前同じようにまつりで中高生があそびコーナーをやるようになったが、当日になってお店当番をする児童がみんな来ないというこ

とがあったため、以降まつりでの児童の出番に慎重になっていた。

今回模擬店は主に男子児童が中高生発案の「餃子の皮ピザ」を作り、女子児童には小学生のサポートに入ってもらおうと考えた。まつりの準備をする中で、チューペット売りにも人手が必要となり、中高生が駆り出されることとなった。とても役割が多く、児童にとって大変なのかなと思わせるほどであったが、心配をよそになんとか当日もやり終えた。当日は大雨で、野外実施のため運営はとても難しいものがあったが、雨用のブルーシートを設営して難を逃れた。雨で途中、シートが剥がれて模擬店の方に水が流れ込んでいた。気が付くと中高生がシートを抑えてずっと流れないように支えてくれていた。見えないところで汗をかき事を少し覚えてきた子どもたち、何も言わずにやってくれる、「手伝って」と言う、「いいよ」と答えてくれる、そんな成長を感じていった。

Ⅳ【秋、冬のステージ出演】

秋の京都市の児童館が一堂に集まり、催しを行う「やんちゃフェスタ」では毎年中高生向けのステージに参加している。ステージ出演も今まで屋台骨だった児童が卒館してからは、一緒にステージに立ったメンバーがほとんど残っておらず、参加が危ぶまれていた。スポーツを中心に活発に遊ぶ男子児童はステージなどには興味がなかったが、女子児童の「おどりがしたい」という思いは昨年の文化体験から引き継がれていた。その児童の気持ちを汲み取り「京炎そでふれ」「ロックソーラン」と毎年踊りを変えて参加することができた。また、男子児童も踊りは難しくても「和太鼓」ならと一生懸命取り組み、男女合同でステージ出演をすることができた。苦手なことでもみんなで取り組むことで、がんばろうという気持ちが児童の中に生まれてきた。

新年が明けて児童館で実施する「ニューイヤーコンサート」は、様々な地域の団体やゲストを招いて行う行事である。中高生の秋のステージ出演メンバーは同じくコンサートにも出演するが、夜間開館での子どもたちの様子で見られる

ギターなど楽器演奏を披露してはどうかと中高生に呼びかけてみた。

スポーツではできないけれど、音楽なら力を発揮できる中高生がいた。いきなりやんちゃフェスタのような大衆のステージは難しくても、児童館で行う地域向けのコンサートなら、よい緊張感で出演できるのではと考えた。予定がなかなか合わず、少ない練習時間ではあったが、見事ステージに立つことができた。バンドの一人として、ギターを弾いた私も中高生と同じく手に汗握ったが、一緒に出演した喜びは一塩だった。

様々な既存事業に参加する中で、児童はただ参加するだけでなく主体的に自分の意見を出すようになり、人と人とのやりとりが豊かになっていったと感じた。また、改めて中高生の興味関心が人それぞれであり、いろいろな子の気持ちを知り、受け止めて、児童館の活動につなげていくことこそ、児童の主体的な活動を支援することだと再確認することができた。ここ2年間の活動を通して、児童が主体的に活動していく中で、気が付けば、思春期児童への対応でとても困っていたあの時のようなトラブルは少なくなっていた。

4、思春期児童の現在地

3年目以降から現在までの中高生の姿を見てみる。

①中高生の姿

児童館で過ごす姿にさらに大きな変化が現れていた。今までは中高生の友達同士で遊ぶことが多かったのだから、日常的に小学生の遊び相手をしてくれるようになった。中にはなんで児童館に小学生がいるのだと煙たがっていた子も、今では小学生が「一緒に遊ぼう」と言ったら「仕方がないなあ」と言って遊んでくれている。取組では今年宿泊キャンプを児童館の学童クラブと合同で実施したのだが、小学生がプログラムを行うために、自分たちがスタッフとして準備を行い、支えてくれた。今までは「やったらいいんやろ」と投げやりな様子もあったが、今では肯定的

にとらえてくれるようになっていた。

相変わらず、中高生同士のケンカは絶えないが、様々な取組でコミュニケーションを深めていったことで、自分の意見を伝えあうことができてきた。結果、同調する、妥協するなど、中高生同士の関係を自ら調整する力が身に付いたと感じる。

環境面では、帰宅時間が遅くなっている児童の様子も鑑みて、夜間開館の閉館を21時から20時半に変更した。今まで21時に閉館しても、外でたまり場のように残って遊んでいる中高生の様子を見ての変更であったが、20時半になっても残っている姿は変わらない。それでも自宅に帰る時間が30分でも早くなればと期待を込めている中で、最近はたまり場に残っている姿が減ってきていた。ちょうど高3世代がそれぞれの進路について考え出し、時間を費やしたこととも影響していたのか、閉館時間短縮の提案もみんな受け入れてくれた。

やんちゃで周りをギクシャクさせていた高3の児童はいよいよ社会の扉を開く所まで来ている。保育士を目指し専門学校に進む子、定時制高校から卒業を目指す子、無事に就職を決めた子も、最後まで大学を諦めずに勉強をしている子も、児童館で遊ぶ姿だけでなく、それぞれの進路を目指して頑張っている姿があった。

②地域・学校の様子

そんな児童館で過ごす中高生の様子やネットワーク会議での意見交換によって地域の見る目も変わっていった。地域向けのおまつりで一緒に汗を流す中高生を見て「とてもがんばってくれている」、「やんちゃそうに見えるけど、たくさん動いてくれてありがたい」と褒めてもらえることが増えた。また小学校や中学校など同じ学校で関係が切れるのではなく、児童館という継続して集える場所があることで、「いつでも楽しい、行きたいと思える居場所になっていて、我が子もずっと関わり続けられる児童館をそんなまなざしで見えています」と保護者から感想をいただいた。施設の利用者アンケートでは、地域の小学生を育てている親からも「早くも中高生の取組を子どもは期待しています」という声もあった。

地域の方からのうれしい声と同様に、中高生自身も様々な活動を通して、地域の方と知り合い、生活する地域、関わりを持つ地域へ目を向けるとても良い機会となったに違いない。

児童館での中高生の様子を地道に学校へ広報し続けていったことで、中高生の取組に少しずつ賛同してもらえることが増えてきた。お便りを快く配布・掲示してもらえるだけでなく、学校側からお便りを直接交換する機会が増え、その際、中高生の学校での様子、児童館での様子を伝え合うことができるようになった。また、学校より「中高生と赤ちゃんとの交流事業を学校の家庭科の授業や保育実習の過程で交流がしたい」と提案があった。そのほかにも、学校の先生自身が「中高生の児童館の過ごし方について話を聞きたい」と取材にも来た。学校が児童館に目を向けてくれるようになってきた。

③新たな見通し

当初の課題として考えられてきた職員体制の問題について、新たな見通しも生まれた。様々な体験活動、多世代交流で中高生を支援してくれたボランティアが単独の取組だけでなく、引き続き日常の児童館、中高生を支援するボランティアとなってきていた。また、卒館した中高生もボランティアスタッフや事あるごとに児童館に来て、職員に近い位置で、活動をサポートしてくれる姿が見られた。中高生という次世代の大人を支援することで、最終的に自館の力に還元されていったのである。

5、最後に

昨年、児童館に来館する児童の姿と昨今の情勢をふまえて、貧困家庭を対象とする「学習支援、余暇活動事業」を実施した。これは近隣の大学生がスタッフとなり、児童館を利用して学習と余暇活動を支援する内容であったが、実際に広報を行い募集をかけたところ、参加希望が叶った中高生の大半は、夜間開館にも参加している中高生であった。「貧困」を目の前で感じたとともに、普通の生活を送ることに困難が伴う貧困家庭の中で、児童がこれから生きていく上で必要な力

を日常生活の中で身につけていくことがとても難しい世の中だと思い知らされた。

では児童の生きる力がどこで得られるのか、周りを見渡してみると「児童館」にその可能性を見いだすことができる。今回この取組は1年間の実施となったが、貧困を目の前に積極的に切り開いていかなければならない活動だといえる。貧困という事実に対して、児童館こそが受け皿となる一定の役割を果たしていくべきである。

こんな児童がいる。「中高生のおどり体験で、おどりに興味を持つようになって、自分たちでチームを見つけて、活動をはじめた」「夕食づくりで料理の楽しさを知って、調理の仕事に就いた」という。児童館での活動を通して、自分の人生を切り開こうとする、生きる姿に胸が熱くなった。まだまだこんな児童もいる。入学して半年、学校をやめるつもりだという。しかし、様々なバイトに打ち込み、時間を見つけて児童館に遊びに来る、自分のやりたいことを必死に探している子、もう一度他の高校に行くために、朝、児童館で自主学習に励む子。児童館での必死に生きていこうとする姿を見て、何かできることはないか、胸が痛んだ。

近年、少子化やネット社会の進行、地域関係の希薄化、貧困が子育て環境に及ぼす弊害など、課題が尽きない。そんな中で、児童館による中高生同士が直接つながりあい、継続して居場所を保証していく「役割」、今日の児童をとりまく社会情勢に即した活動展開を図る「役割」の意義は計り知れない。中高生の児童館での様々な活動、楽しかったという思い出、人と交わった経験こそが今後の人生において必要不可欠となる「生きる力」であるはずだ。

児童館が「これからの中高生」と「巣立っていった中高生」の生きる力でありたい。